

## 教育理念を基軸とした学び

― 創立者作詞による学園歌への視座 ―

平木 茂

### 序言

古来より、未来を見通して如何に学んでゆくかは基本的課題である。この課題は、今日の情報化の渦の中にあつて揺らいでいるかの様相を呈している。

この状況下、学園での学びは建学の精神および教育理念を基軸とする。この軸がずれない揺らがないことが益々重要であろう。

つまり、これを基軸とすることで、その学園における学びの基本姿勢が定まる。そして、それは学園の基盤に立脚する。そのことにより学びには学園の学風と伝統力が加わる。そして学びの成果の可能性が一段と大きくなって行く。建学の精神および教育理念を基軸として学ぶことは、このことに他ならない。

そこで、各学園における建学の精神および教育理念は、学園歌の歌詞に認められるところである。そして、この歌詞に整合した学園行事等が認められる。学園ではそれらが独自の学風を醸し出す。これが学園の伝統力に連動していく。

各学園においてはこの文脈における成果が認められる。

特に学園歌の歌詞においては作詞者が創立者の場合、建学の精神および教育理念は歌詞そのものに顕著に現されている。その最たるものの一つが国士館の「館歌」である。ここではこの国士館の「館歌」に、その視点をあてるものとする。

学園における学びは、情報化の渦の中に埋没して混乱することなく、学園歌の歌詞に現された教育の理念を基軸とする。このことを確かにして学びの成果を上げていくことを期するものである。

### 第一章 国士館における「館歌」

国士館の館歌は、創立者である柴田徳次郎初代館長によって大正八年に作詞された。創立者は学園の教育規範を吉田松陰に求めた。その松陰を祭る松陰神社隣接地に移転を果たしたのはその年である。その歌詞には、正に創立者の学園教育に対する

基本的指針が綴られている。

## 第一節 作詞者

国士館「館歌」の作詞は学園を創立した柴田徳次郎である。



「柴田 徳次郎」

柴田 徳次郎（しばた とくじろう、一八九〇年十二月二十日～一九七三年一月二十六日）

福岡県那珂郡別所村（現…筑紫郡那珂川町別所）出身。十六歳で上京し、正則英語学校・芝中学校を経て一九一五年に早稲田大学専門部政経科を卒業。在学中に頭山満・緒方竹虎・中野正剛の知遇を得、翌年青年大民団を組織。一九一七年十一月四日大民団の私塾として国士館を創設する。

## 著書

- 革命は如何にして起こるか
  - 国士館と教育
  - 頭山翁清話（編）
  - 日本はこうすれば立直る
- 作詞

- 国士館館歌
- 国士館学徒吟
- 要職等
- 国士館 総長
- 学校法人国士館理事長
- 国士館大学・国士館短期大学学長（注二）

## 第二節 作曲者

館歌の作曲は東儀鉄笛である。

東儀 鉄笛（とうぎ てつてき 明治二年六月十六日（一八六九年七月二十四日）～大正十四年（一九二五年）

二月十四日)

明治・大正期の雅楽家・作曲家・俳優。本名・東儀季治(すえはる)。京都府出身。父・季芳(すえよし)は、安部季誕(すえのぶ)の子として生まれ、のちに、祖父である東儀季郭(すえもり)の死後、東儀の姓を継いだ。同じ東儀でも、徳川幕府に仕えた楽師の末裔にあたる雅楽演奏家・東儀秀樹とは、家系を異にする。

一三〇〇年続く雅楽の家柄に生まれ、宮内庁雅楽寮に勤める傍ら、東京専門学校(現・早稲田大学)に学んだ(中退)。

一九〇六年設立の坪内逍遙の「文芸協会」に加わり、新劇俳優としても活躍。「ベニスの商人」のシャイロック、「マクベス」のマクベスなどを得意とした。協会解散後は無名会を組織。また西洋音楽を学び、東京音楽学校(現・東京芸術大学)講師となった。

「都の西北 早稲田の森に…」の歌い出しで有名な早稲田大学校歌(作詞相馬御風)の作曲者。イエール大学の学生歌である「オールドイエール」の旋律を採り入れているが、さらに「オールドイエール」は、イギリスやアメリカの古民謡の影響の下にあったとされている。

### 第三節 館歌

主な作曲作品

- ・歌劇「常闇」(台本・坪内逍遙)
- ・早稲田大学校歌「都の西北」(作詞・相馬御風)
- ・早稲田中学校・高等学校第一校歌(作詞・坪内逍遙)
- ・広島県・庄原市立本小学校校歌(作詞・稲毛祖風)
- ・国士館館歌(作詞・柴田徳次郎)(注二)

一 霧<sup>きり</sup>わけ昇<sup>のぼ</sup>る陽<sup>ひ</sup>を仰<sup>あお</sup>ぎ  
梢<sup>こずえ</sup>に高<sup>たか</sup>き月<sup>つき</sup>を浴<sup>あ</sup>び

皇<sup>みくに</sup>国<sup>くに</sup>に殉<sup>ゆる</sup>す大<sup>ます</sup>丈<sup>すち</sup>夫<sup>お</sup>の  
ここ武<sup>む</sup>蔵<sup>ざい</sup>野<sup>の</sup>の国<sup>こく</sup>士<sup>し</sup>館<sup>かん</sup>

二 松<sup>しょう</sup>陰<sup>いん</sup>の祠<sup>し</sup>に節<sup>せつ</sup>を磨<sup>ま</sup>し  
豪<sup>こう</sup>徳<sup>とく</sup>の鐘<sup>かね</sup>氣<sup>き</sup>を澄<sup>すま</sup>す

朝<sup>あさ</sup>な夕<sup>ゆう</sup>なにつく呼<sup>い</sup>吸<sup>き</sup>は  
富<sup>ふ</sup>嶽<sup>がく</sup>風<sup>ふう</sup>しの天<sup>てん</sup>の風<sup>かぜ</sup>

三 区々現身の粗薪に

大覚の火を打ち点し

三世十方焼き尽す

至心の焰あふらばや(注三)

#### 第四節 概要

「館歌」第一および第二は、学園の環境についての内容である。

そして、第三は、国士館学徒の使命が籠められている。

この事について、創立者は、次のように述べている。

「その環境は、日本一である。」

「国士館の健児は、「読書・体験・反省思索」によって、その偉大なる使命を悟らなければならない。」(注四)

このことは、まさに「館歌」の歌詞に秘められている。

#### 第五節 概説

館歌 一 霧わけ昇る陽を仰ぎ

梢に高き月を浴び

皇国に殉す大丈夫の

ここ武蔵野の国士館

大正八年に現校地に移転した当時の学園環境が偲ばれる。

建学当時、ここは(現在の国士館の地)武蔵野原で民家はなかった。夜明けと共に松陰神社の森から朝日が昇るのを仰げた。(当時は境内に杉の大本があった)

夕べには、この松陰の森の梢高く出てくる月を仰いだ。(注五)

皇国に殉す大丈夫については、「館歌」第二に繋がっている。

また、ここでは、早朝から夕刻まで努めようとの指針が示されている。そして、これは、まさに学園の信条である「誠意・勤労・見識・気魄」に整合する。

館歌 二

松陰の祠に節を磨し

豪徳の鐘氣を澄す

朝な夕なにつく呼吸は

富嶽嵐しの天の風

「松陰の祠に節を磨し」

学園は、吉田松陰の教育を規範とした。

吉田松陰をはじめ勤皇の志士たちは、みな熱烈な愛国者であり、皇国のために一身を捧げた大丈夫であった。皇国のために殉じた吉田松陰を祀る松陰神社に詣で往時を偲べば、おのずから氣節が磨かれた。(注六)

創立者は、松陰神社について次のように語った。

「私は、中学三年のころ赤坂からはるばる歩いて松陰神社に参り、友人たちと、天下・国家を甲論乙駁したものである。」

「国士館を創立したとき、朝早く松陰先生のお墓に参ったところ、墓前の紅葉が真っ赤に照り映えて、吉田松陰処刑のとき、首からほとばしった血潮と思われるような色であった。その瞬間、私は「身はたとひ武蔵の野辺に朽ちぬとも留めおかまし大和魂」という松陰先生辞世の歌を思い出し、思わず、国士館の館長として「留めおきし大和魂時を得て たぎる血しおか匂ふもみじば」という歌を詠み、国士館の徽章は、この松陰神社墓畔の「もみじ」ときめたのである。」(注七)

## 「国士館の徽章」



「中学校」



「高等学校」



「大学」

国士館の東隣にある松陰神社には、勤皇の志士吉田松陰のお骨がお祀りしてある。吉田松陰（一八三〇～五九）は、尊皇攘夷を唱えて奔走した。安政五年、条約調印、將軍継嗣問題をめぐり国情は紛争し、井伊直弼が大老となり

尊攘派を弾圧するに及び、翌年安政の大獄により、他の志士と一緒に江戸伝馬町の牢獄につながれた。そして、同年十月二十七日

「身はたとひ武蔵の野辺に朽ちぬとも留めおかまし大和魂」  
「親思う心にまさる親心 今日のおとずれ何ときくらん」

の辞世を残して、伝馬町の獄舎で首を打たれ小塚原の罪人埋葬所に埋骨された。ときに二十九歳であった。

吉田松陰の遺骸は、その後、弟子の高杉晋作等が世田谷若林の藩主毛利家下屋敷の大夫山（現在地）に移した。明治十五年になって乃木大将（少佐の時）等がお宮を造ってお参りしたのである。

国士館は、吉田松陰の命日である二十七日を記念して、大学院、学部（体育、政経、工学、法学、文学、政経二部）短期大学等開設の開学式を行ってきた。（注八）

尚、現在は、短期大学は閉学、新たに二十一世紀アジア学部、工学部は理工学部発展的解消されている。

「豪徳の鐘氣を澄す」  
（こうとく かねき すま）

学園は、松陰神社と井伊直弼のお墓がある豪徳寺の間に位置している。これには歴史的因縁を痛感する。

豪徳寺には、徳川幕府末期の大老（現在の総理大臣）井伊直弼（一八一五―六〇）の墓がある。

その遺骸を葬った豪徳寺の鐘は、朝夕六時に鳴る。その梵鐘には、金が鑄込であるそうで、実に妙なる響きを発する。この音を聞くと、自然に心が静まり、読書、学問に励もうという意欲が湧き出るのであった。

井伊直弼は、幕府の権力を一身に振って、天皇の勅許ちよつきよを得ずに日米修好通商を強硬に調印し、さらに將軍継嗣問題でも専断強硬策をもって紀伊の慶福よしゆき（家茂のこと）を継嗣と決定したことなどが一層、政情を悪化させ、勤皇の志士たちを硬化させた。また安政六年には安政の大獄を起こし、一橋派、尊攘派を弾圧し、全国の志士たちを逮捕して投獄、処刑した。

この弾圧で、藩主以下多くの犠牲者を出した水戸藩の尊攘有志の脱藩浪士齊藤監物以下十八名によって、万延元年三月三日雪の朝、井伊大老が、三月の節句のお祝いの

ため江戸城へ登城の途中、桜田門外において暗殺された。ときに直弼四十五歳であった。（注九）

「朝あさな夕ゆふなにつく呼吸いきは  
富嶽ふがく嵐おろしの天てんの風かぜ」

現在においては晴天時に三十四号館の十階スカイラウンジより富士山を仰ぐことが可能である。

創立当初学校附近一帯は、武蔵野原で民家もなく、他の障害物もなかったから國士館に居ながら富士山を仰ぐことができた。その富士の霊峰から吹きおろす清い風、澄みきった空気を胸一杯吸っていた。（注一〇）

館歌 三 区々くく現身うつしみの粗薪あらまきに

大覚だいかくの火ひを打ち点とし  
三世さんせい十方じっぽう焼き尽す

至<sup>し</sup>心<sup>しん</sup>の焰<sup>ほ</sup>あふらばや

「区<sup>く</sup>々<sup>く</sup>現<sup>う</sup>身<sup>つ</sup>の粗<sup>あら</sup>薪<sup>まき</sup>に

大<sup>だい</sup>覺<sup>かく</sup>の火<sup>ひ</sup>を打<sup>う</sup>ち点<sup>と</sup>し

三<sup>さん</sup>世<sup>せ</sup>十<sup>じ</sup>方<sup>つ</sup>焼<sup>や</sup>き尽<sup>つ</sup>す」

ここでは特に創立者の燃える血潮が表現されている。

われわれは、五尺の小さい身体である。宇宙の広大さから見れば、まことに「区」々たるものである。しかし、その身体には、生命が躍動しており、この区々とした現身をたきつけにして、大きな覺りの火をとし、三世（過去・現在・未来）と十方（四方・四隅・上下）即ち無限の時間と無限の空間も、覺りの火をもって不浄なものは一切焼き尽くし、極樂世界を作るのである。（注一二）

「至<sup>し</sup>心<sup>しん</sup>の焰<sup>ほ</sup>あふらばや」

國士館の学徒は、至心（聖なる心）にこの偉大なる覺りの焰であらゆるけがれを焼き尽くす。即ち大悟徹底するのである。（注一二）

これについて、創立者は、次のように述べている。

「我氣浩然、同太虚 というような悟りを開くのである。」

（注一三）

まさに、心は、広くゆったりとして、広漠たる太虚、虚空の境地であり、古代中国の宇宙觀を現している。

## 第六節 吉田松陰

創立者は吉田松陰の教育を規範とした。その教育は学園の教育展開に多々認められる。



「松陰の肖像画」

吉田松陰の肖像画が門人の画家である松浦松洞本名亀太郎によって残されている。

これは一八五九（安政六）年に松陰を江戸へ送るようという知らせを受けて、同じく門下生であり妹の夫である久坂玄瑞のすすめによって描かれた。



「吉田松陰」

吉田 松陰／吉田 矩方（よしだしょういん／よしだのりかた）は、日本の武士（長州藩士）、思想家、教育者、兵学者。一般的に明治維新の精神的指導者・理論者として名が挙げられることが多い。

生涯

文政一三年（一八三〇年）八月四日、長州藩士・杉百合之

助の次男として生まれる。天保五年（一八三四年）に叔父で山鹿流兵学師範である吉田大助の養子となるが、天保六年（一八三五年）に大助が死去したため、同じく叔父の玉木文之進が開いた松下村塾で指導を受けた。

しかしアヘン戦争で清が西洋列強に大敗したことを知って山鹿流兵学が時代遅れになったことを痛感すると、西洋兵学を学ぶために嘉永三年（一八五〇年）に九州に遊学する。また江戸に出て佐久間象山の師事を受けた。嘉永五年（一八五二年）、長州藩に無許可の形で宮部鼎蔵らと東北の会津藩などを旅行したため、罪に問われて士籍剥奪・世禄没収の処分を受けた。

嘉永六年（一八五三年）、マシュー・ペリーが浦賀に来航すると、師の佐久間象山と黒船を視察し、西洋の先進文明に目先を囚われた。安政元年（一八五四年）に浦賀に再来航していたペリーの艦隊に対してアメリカ密航を望んだ。これは開国に求められる豪快そのものであった。しかし密航を拒絶されて送還されたため、松陰は乗り捨てた小舟から発見されるであろう証拠が幕府にわたる前に奉行所に自首し、伝馬町の牢屋敷に送られた。この密航事件に連座して師匠の佐久間象山も入牢されている。幕府の

一部ではこのときに佐久間、吉田両名を死罪にしようという動きもあった。が、老中首座の阿部正弘が反対したため、助命されて長州の野山獄に送られている。

安政二年（一八五五年）に出獄を許されたが、杉家に幽閉の身分に処された。安政四年（一八五七年）に叔父が主宰していた松下村塾の名を引き継ぎ、杉家の敷地に松下村塾を開塾する。この松下村塾において松陰は長州藩の下級武士である久坂玄瑞や伊藤博文などの面々を教育していった。なお、松陰の松下村塾は一方的に師匠が弟子に教えるものではなく、松陰が弟子と一緒に意見を交わしたり、文学だけでなく登山や水泳なども行なうという「生きた学問」だったといわれる。

安政五年（一八五八年）、幕府が無勅許で日米修好通商条約を締結したことを知って激怒し、討幕を表明して老中首座である間部詮勝の暗殺を計画する。だが、弟子の久坂玄瑞、高杉晋作や桂小五郎（木戸孝允）らは反対して同調しなかったため、計画は頓挫し、松陰は長州藩に自首して老中暗殺を自供し、野山獄に送られた。

やがて大老・井伊直弼による安政の大獄が始まると、江戸の伝馬町牢屋敷に送られる。幕閣の大半は暗殺計画は

実行以前に頓挫したことや松陰が素直に罪を自供していたことから、「遠島」にするのが妥当だと考えていたようである。しかし井伊直弼はそれほど甘い人物ではなく、素直に罪を自供したことが仇となって井伊の命令により「死罪」となってしまう、安政六年（一八五九年）十月二十七日に斬刑に処された。享年三十。生涯独身であった。

#### 年譜

- ・ 一八三〇年九月二〇日（文政十三年八月四日）、長門国萩松本村（現・山口県萩市椿東椎原）に家禄二十六石の萩藩士・杉百合之助、瀧の次男として生まれる。
- ・ 一八三四年（天保五年）、父の弟である吉田大助の仮養子となる。吉田家は山鹿流兵学師範として毛利氏に仕え家禄は五十七石余の家柄であった。
- ・ 一八三五年（天保六年）、大助の死とともに吉田家を嗣ぐ。兵学師範としての職責を果たせるよう、同じく父の弟で叔父である玉本文之進から厳しい教育を受ける。
- ・ 一八四〇年（天保十一年）、藩主毛利敬親の御前で「武教全書」戦法篇を講義し、藩校明倫館の兵学教授として出仕する。

- ・ 一八四二年（天保一三年）、叔父の玉本文之進が私塾を開き松下村塾と名付ける。
- ・ 一八四五年（弘化二年）、山田亦介（村田清風の甥）から長沼流兵学を学び、翌年免許を受ける。九州の平戸へ遊学した後に藩主の参勤交代に従い江戸へ出て、佐久間象山らに学ぶ。佐久間からは「天下、国の政治を行う者は、吉田であるが、わが子を託して教育してもらう者は小林（小林虎三郎）のみである」と、二人の名前に共通していた「トラ」を引用し「象門の二虎」と褒められている。
- ・ 一八五一年（嘉永四年）、東北地方へ遊学する際、通行手形の発行が遅れたため、肥後藩の友人である宮部鼎蔵らとの約束を守る為に通行手形無しで他藩に赴くという脱藩行為を行う。この東北遊学では、水戸で会沢正志斎、会津で日新館の見学を始め、東北の鉱山の様子等を見学。秋田藩では相馬大事件の真相を地区住民に尋ね、津軽藩では津軽海峡を通行するという外国船を見学しようとした。
- ・ 一八五二年（嘉永五年）、脱藩の罪で士籍家禄を奪われ杉家の育（はぐくみ）となる。
- ・ 一八五三年（嘉永六年）、米国のペリー艦隊の来航を見  
ており、外国留学の意志を固め、同じ長州藩出身の金子重輔と長崎に寄港していたプチャーチンのロシア軍艦に乗り込もうとするが、ヨーロッパで勃発したクリミア戦争にイギリスが参戦した事から同艦が予定を繰り上げて出航した為に失敗。
- ・ 一八五四年（安政元年）、ペリーが日米和親条約締結の為に再航した際には金子と二人で停泊中のポーハタン号へ赴き、乗船して密航を訴えるが拒否された。事が敗れた後、松陰はそのことを直ちに幕府に自首し、長州藩へ檻送され野山獄に幽囚される。獄中で密航の動機とその思想的背景を『幽囚録』に著す。
- ・ 一八五五年（安政二年）、生家で預かりの身となるが、家族の薦めにより講義を行う。その後、叔父の玉本文之進が開いていた私塾松下村塾を引き受けて主宰者となり、木戸孝允、高杉晋作を初め久坂玄瑞、伊藤博文、山縣有朋、吉田稔麿、前原一誠等維新の指導者となる人材を教える。
- ・ 一八五八年（安政五年）、幕府が勅許なく日米修好通商条約を結ぶと松陰は激しくこれを非難、老中の間部詮勝の暗殺を企てた。長州藩は警戒して再び松陰を投獄した。

・一八五九年（安政六年）、幕府は安政の大獄により長州藩に松陰の江戸送致を命令する。松陰は老中暗殺計画を自供して自らの思想を語り、同年、江戸伝馬町の獄において斬首刑に処される、享年三十（満二十九歳没）。獄中にて遺書として門弟達に向けて『留魂録』を書き残す。その冒頭に記された辞世は、身はたとひ武蔵の野辺に朽ちぬとも留め置かまし大和魂。また、家族宛には『永訣書』を残しており、こちらに記された親思ふ心にまさる親心けふのおとずれ何ときくらんも辞世として知られている。

## 思想

### 一君万民論

「天下は一人の天下」と主張して、藩校明倫館の元学頭・山県太華と論争を行っている。「一人の天下」という事は、国家は天皇が支配するものという意味であり、天皇の下に万民は平等になる。一種の擬似平等主義であり、幕府（ひいては藩）の権威を否定する過激な思想であった。なお、「一君万民」の語を松陰が用いたことはない。

### 飛耳長目

塾生に何時も、情報を収集し将来の判断材料にせよと説いた、これが松陰の「飛耳長目（ひじちようもく）」である。自身東北から九州まで脚を伸ばし各地の動静を探った。萩の野山獄に監禁後は弟子たちに触覚の役割をさせていた。長州藩に対しても主要藩へ情報探索者を送り込むことを進言し、また江戸や長崎に遊学中の者に「報知賞」を特別に支給せよと主張した。松陰の時代に対する優れた予見は、「飛耳長目」に負う所が大きい。

### 草莽崛起

「草莽」は『孟子』においては草木の間に潜む隠者を指し、転じて一般大衆を指す。「崛起」は一斉に立ち上がることを指す。在野の人よ、立ち上がれ、の意。

安政の大獄で収監される直前（一八五九年四月七日）、友人北山安世に宛てて書いた書状の中で「今の幕府も諸侯も最早酔人なれば扶持の術なし。草莽崛起の人を望む外頼なし。されど本藩の恩と天朝の徳とは如何にして忘るゝに方なし。草莽崛起の力を以て、近くは本藩を維持し、

遠くは天朝の中興を補佐し奉れば、匹夫の諒に負くが如くなれど、神州の大功ある人と云ふべし」と記して、初めて用いた。この言葉は日本文化チャネル桜、西村修平、瀬戸弘幸などがスローガンとして用いている。

## 対外思想

『幽囚録』で「今急武備を修め、艦略具はり礮略足らば、則ち宜しく蝦夷を開拓して諸侯を封建し、間に乗じて加摸察加（カムチャッカ）・陳都加（オホーツク）を奪ひ、琉球に諭し、朝覲会同すること内諸侯と比しからめ朝鮮を責めて質を納れ貢を奉じ、古の盛時の如くにし、北は満州の地を割き、南は台湾、呂宋（ルソン）諸島を収め、進取の勢を漸示すべし」と記し、北海道の開拓、沖縄（当時は独立した国家であった）の日本領化、朝鮮の日本への属国化、満州・台湾・フィリピンの領有を主張した。松下村塾出身者の多くが明治維新後に政府の中心で活躍した為、松陰の思想は日本の対外政策に大きな影響を与えることとなった。

## ゆかりの地

吉田松陰の故郷である山口県萩市には誕生地、投獄され

た野山獄、教鞭をとった松下村塾、遺髪を埋葬した松陰墓地、祀った松陰神社等がある。

## 墓所・霊廟

刑死後、隣接した小塚原回向院（東京都荒川区）の墓地に葬られたが、一八六三年（文久三年）に高杉晋作ら攘夷派の志士達により現在の東京都世田谷区若林に改葬された。現在も回向院墓地に墓石は残る。世田谷区の墓所には一八八二年（明治一五年）に松陰神社が創建された。また、生地の山口県萩市では死後百日目に遺髪を埋めた墓所（遺髪塚）が建てられた（市指定史跡）他、一八九〇年（明治二十三年）に建てられた松陰神社（県社）がある。靖国神社にも維新殉難者として合祀されている。（注一四）

## 「門下生」

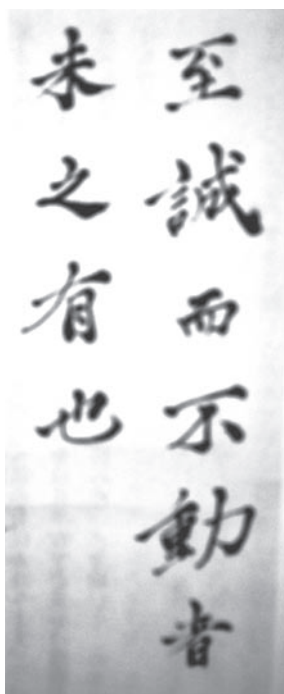
門下生達は短期間の教育にも関わらず国家の一大事にあたり身命をかけて活躍した。創立者は特にこの点に着目した。

後に京都で志士として活動した者や、明治維新で新政府に関わる者など幕末・明治において大きな活躍を果たす久坂玄瑞、

高杉晋作、吉田栄太郎、入江杉藏、伊藤博文（初代総理大臣・昭和の千円札）など……。

# 「松陰の書」

この書は松陰が江戸へ行く前に書いて小田村伊之助に与えたもの。



「松陰の書」

## 「文武稽古萬世不朽の御仕法立氣附書」（注一五）

松陰は嘉永四年の新年早々に藩府より文武を兼備する武士育成法を建言するようにとの命を受けた。そして二月二十日に提出したのが「文武稽古萬世不朽の御仕法立氣附書」である。これは十四項目にわたる大文書である。

現代においても、この内容は文武両道育成の可能性を示唆しているものである。

その前文は次のとおりである。

（略）……御家中孰れも武士道を守り禮義廉恥の風を成し、利を恥じて義に進み……（略）

これに続いて十四項目にわたっている。

一、（略）……文武御興隆の大本は御家中貴賤を撰ばず剛毅木訥の風を成し候段、第一義と存じ奉り候。……（略）

一、武藝師の輩夫々藝業さへ相傳へ候へば職分相済み候様心得違い候段、師たるものの不行届は勿論の事には候へども、……（略）……武士道相勵み国家の御為を存じ候。……（略）

以下各項目において文武を兼備する武士育成法について建言



されている。

## 第七節 学園行事等

館歌に現された学園の教育理念は学園行事等において成果をあげている。

国士館の年頭では恒例の寒稽古が実施される。対象は全ての学園構成員である。

まさに「館歌」第一の「霧わけ昇る陽を仰ぎ」および「館歌」第三における「区々現身の粗薪に、大覚の火を打ち点し、三世十方焼き尽す、至心の焰あふらばや」が心技体に満ち溢れた展開である。これはまさに松陰が建言した文武を兼備する武士の育成法における剛毅本訥を第一義とする等の実践として認められる。

そして最終日には、「松陰神社」において、武道系倶楽部有志諸団体が奉納演武大会を開催する。平成二十二年年頭の参加倶楽部は、古武藝杖道部、防具空手道「傳拳」、練心館空手道部「少林寺流空手道」、日本拳法部、躰道部、少林寺拳法部等である。指導関係者と部員は、松陰神社本殿で御祓いを受ける。その後、同本殿前で倶楽部ごとに演武を奉納する。

この年頭行事に端を発して、「館歌」の歌詞は、さまざまに展開し具現化されているのが認められる。

尚、寒稽古は高等学校・中学校においても展開されている。さらに定時制課程通信制課程においては、創立記念日において、生徒の社会貢献活動を表彰している等が認められる。

これらの展開は、学園が目指す、より良い社会を創ることに貢献する人材育成に連動している。

まさに国士館建学の精神および教育の理念は「館歌」の歌詞に表現されている。これは学園教育の支柱とするところである。それに基づいて伝統が形成されていく。さらに、これを基軸として実践することで伝統の力が加わり、現代・未来への多様な可能性が大きくなる。

特に国士館教育は、館歌に示されるように吉田松陰の教育を規範としている。松陰は、「華夷弁別」を説いた。つまり眼を大きく開いてこの時代を見ることが大事とした。時代を創るのは人間である。人のあるところ全世界が学びの地である。実際にその地に立ち知見を広めることこそが我々に、今この時代に何をなすべきかを教えてくれるとしている。

国士館における四徳目「誠意・勤労・見識・気魄」三綱領「読書・体験・反省思索」は実にこれらの成果である。

## 第二章 学風

各学園においては独自の学風が認められる。その独自性はまさに各学園の建学の精神および教育理念の成果である。

このことは各学園において広く認められるところといえる。

国士館における独自の学風は正しく「館歌」

の歌詞に整合する。これは学園歌の斉唱、学園行事等をとおして独自の学風が養われていることによる成果である。

このことは他の学園においても同様である。

慶應義塾「塾歌」は富田正文の作詞、信時潔の作曲により、昭和十五年十一月に完成した。この塾歌は、翌16年1月10日の福澤先生誕生記念会当夜、三田の大講堂で発表された。それ以来、式典などのたびに歌われている。

## 一、見よ

風に鳴るわが旗を

新潮寄するあかつきの

嵐の中にはためきて

文化の護りたからかに

貫き樹てし誇りあり

樹てんかな この旗を

強く雄々しく樹てんかな

あ、わが義塾

慶應 慶應 慶應

## 二、往け

涯なきこの道を

究めていよ、遠くとも

わが手に執れる炬火は

叡智の光あきらかに

ゆくて正しく照らすなり

往かんかな この道を

遠く遙けく往かんかな

あ、わが義塾

慶應 慶應 慶應

## 三、起て

日はめぐる丘の上

春秋ふかめ揺ぎなき



学びの城を承け嗣ぎて

執る筆かざすわが額の

徽章の誉世に布かむ

生きんかな この丘に

高く新たに生きんかな

あゝわが義塾

慶應 慶應 慶應

日本大学「校歌」の作詞は相馬御風、作曲は山田耕筰による。

一、日に日に新たに 文化の華の

栄ゆく世界の 曠野(こうや)の上に

朝日と輝く 国の名負(お)いて

巍然(ぎぜん)と立ちたる 大学日本

正義と自由の 旗標(きひょう)のもとに

集まる学徒の 使命は重し

いざ讃えん 大学日本

いざ歌わん われらが理想

二、四海に先(さき)んじ 日いづる国に

富嶽とゆるがぬ 建学の基礎(もと)

栄ある歴史の 道一すじに

向上息(や)まざる 大学日本

治世(ちせい)の一念 炎と燃ゆる

われらが行く手の 光を見よや

いざ讃えん 大学日本

いざ歌わん われらが理想

### 第三章 伝統力と学問力

それぞれの学園に独自の学園歌がある。

そこには、その学園の本質が秘められている。

今日、社会の複雑さ多様化とともに学問は、大きく変化している。その一途は留まるところを知らない。

しかし、学園において不易なのは、建学の精神および教育理念である。それぞれの学園には、独自の建学の精神および教育理念に基づき特色ある教育活動の実践が認められる。そこに、伝統校としての威厳と誇りが醸し出されてくる。これが伝統力となる。

まさに、学園の多様な教育活動の根底に、その教育理念の言わ

ば鉉脈がある。そして、その源は、学園歌の歌詞に見出すことができる。

これを読み取ることが学問力の向上に繋がる。

つまり育まれた成果としての学風とその伝統力が同様に学びの成果に連動することに他ならない。

歌詞の意味するところを読み取り理解することで、学園における学びの基本姿勢がより確かなものとなる。

この歌詞を如何に意識し志を立てるかが重要ということになる。

## 結言

各学園にはそれぞれの学園歌に基づく学風が認められる。それはまさに建学の精神および教育理念が学園歌の歌詞に籠められていることに他ならない。そしてそれがさまざまに具現化されて学風と伝統力を増している。

この観点から学園歌の歌詞を読み取ることが大事である。そして、それを基軸として学ぶことで学園の成果としての学風とその伝統力を得る。これと同様に学問力の成果が高まる。

まさに各学園に学園歌あり。そこには、建学の精神および教育理念の清流とともに学問力を増す要因が秘められているので

ある。

## 主要参考文献等

- 柴田徳次郎「訓話資料」国士舘大学 一九七二  
山口県教育会「吉田松陰全集」大和書房 一九七二  
国士舘大学同窓会編「国士舘大学創立者 柴田徳次郎伝信念と気魄の生涯」国士舘大学同窓会 一九七八  
村中嘉二郎編「柴田徳次郎言論集」国士舘大学 一九八〇

## 注記

- 一) フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』 2009
- 二) 前掲『ウィキペディア (Wikipedia)』
- 三) 村中喜二郎「柴田徳次郎言論集」国士舘大学 1980
- 四) 柴田徳次郎「国士舘歌の意味」(訓話資料) 国士舘大学 1972

- 五) 國士館大学同窓会編『國士館大学創立者柴田徳次郎伝信念と気魄の生涯』國士館大学同窓会 1978 PP509～514
- 六) 前掲書「國士館館歌の意味」
- 七) 同書
- 八) 前掲書『國士館大学創立者柴田徳次郎伝信念と気魄の生涯』
- 九) 同書
- 一〇) 同書
- 一一) 同書
- 一二) 同書
- 一三) 前掲書「國士館館歌の意味」
- 一四) 前掲『ウィキペディア (Wikipedia)』
- 一五) 山口県教育会「吉田松陰全集」大和書房 1972